

水戸市三の丸地区における住民の友人ネットワーク

岩間信之・中村昭史・斎藤幸生・高橋伴幸
仙頭達朗・増山聖子・松井圭介

キーワード：都市中心部，友人ネットワーク，ライフパス，コミュニティ，公民館

I はじめに

人々は社会生活を営む中で、さまざまな集団の一員として人間関係を築いている。例えば、職場の同僚、友人、地域の町内会、自治組織、ボランティアグループ、趣味のサークルなどが挙げられよう。特に都市においては、日頃からさまざまな属性の人と接触する機会が多く、個人は多様な集団に所属しているといえる。また都市には、商店、官公庁、企業のオフィス、美術館、劇場等の諸施設が集積しており、人々はそうした施設を利用することによって様々な形態の社会的相互作用を容易かつ迅速に行うことができる。

こうした都市における社会関係の多様性に着目するとき、都市社会学や都市人類学の分野では、従来の集団的アプローチに代わって、社会的ネットワークのアプローチが注目を集めるようになってきている¹⁾。その代表的論者 C.S. フィッシャーは、自らのアーバニズムの下位文化理論²⁾を検証するなかで、北カリフォルニアにおける社会的ネットワークの調査を実施している。詳細な検証作業を経てフィッシャーは「人口規模の大きい都市ほど、親類ネットワークが希薄であり、友人ネットワークが密である」と報告している。また同様の調査を行った大谷（1995）も、この報告が日本においても妥当すると述べている。こうして都市的生活を象徴するものとして、友人ネットワークの

重要性が指摘され、個人の持つ人間関係の実証的分析の研究蓄積が望まれている³⁾。

一方、地理学において数多くの研究が蓄積されてきた自治組織や信仰・祭礼組織、生活組織に着目した社会集団・地域集団に関する研究も、ある節目を迎えている。従来、地域社会の求心的な役割を果たしていた町内会・自治会やそうした自治組織のもとで編成されていた各種社会組織は、都市化の進行とともに脆弱化しつつある。こうした町内会レベルの地域組織の弱体化に伴い、近年では小学校・中学校の学区を単位とした、より広範な「地区コミュニティ」へとその機能が再編されつつある⁴⁾。地区コミュニティ制度の先進事例である水戸市においては、自治活動、ボランティア活動、サークル活動など実質的な機能は地区コミュニティが担うようになってきている。都市部におけるこうした組織機能の広域化も視野に入れた研究が必要とされる。

本稿では、こうした動向を踏まえ、水戸市三の丸地区に居住する住民の友人ネットワークの実態を分析することによって、都市中心部という地域特性が住民生活に与える影響を考察する。特に新たな友人関係の形成に果たす都市空間の役割に着目する。都市社会学的な研究が、人口密度や人口の異質性に着目してきたことに対して、本稿では具体的な都市空間の中で生じる交友関係の分析を行いたい。

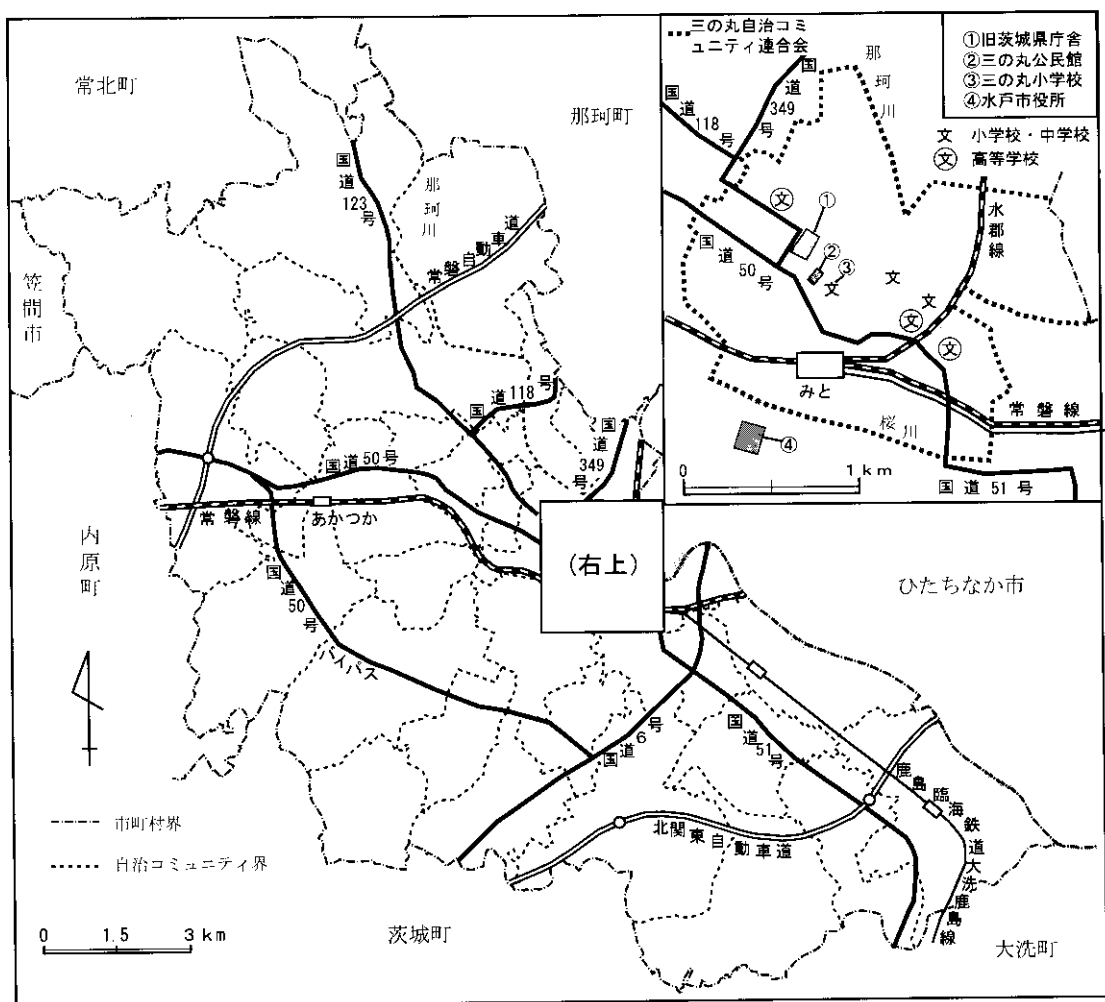
本論文の構成は以下の通りである。まずⅡ章で水戸市におけるコミュニティ組織を概観し、研究対象地域である三の丸地区のコミュニティ活動の実態を述べる。Ⅲ章では、三の丸地区の居住者に向けて行ったアンケート調査（2001年5～6月）をもとに、住民の類型化を行い、友人ネットワークの空間分布の傾向を分析する。Ⅳ章では聞き取り調査をもとに、類型ごとの事例から詳細な交友関係の実態を把握する。Ⅴ章ではⅡ～Ⅳ章の議論を踏まえ、都市中心部における交友関係の形成について、空間や場所が果たす役割について検討する。

Ⅱ 水戸市における自治会組織と公民館活動

Ⅱ-1 研究対象地域

水戸市は茨城県のほぼ中央部に位置し、那珂川を画して北はひたちなか市、那珂町、南は大洗町、茨城町、西は笠間市、内原町、常北町と接している（第1図）。

研究対象地域に選定した三の丸地区は、水戸市北部の上市台地の先端に位置する。那珂川と桜川に挟まれた舌状台地の先端部と、その周囲に広がる沖積低地という地形条件のもと、古くから水戸市の中心地として繁栄してきた。現在でも、地区



第1図 研究対象地域

の中央部にJR水戸駅が位置し、駅から北西へほぼ直線的に伸びる国道50号線沿いには、公共施設や金融・業務・商業施設の集積がみられ、水戸市の中心軸となっている。



写真1 三の丸地区の中心市街地
(2000年9月撮影)

2001(平成13)年9月現在での、三の丸地区の世帯数は2,937世帯、人口6,488である。特に地区の中心である三の丸1丁目～3丁目にかけての古くからの住宅地に、三の丸地区全体の25%にあたる724世帯、1,598人が居住している。

三の丸という名称が示すように、かつては水戸城の城郭内の武家屋敷地であった。1841(天保12)年に時の藩主徳川斉昭によって水戸藩校である弘道館が建設され、青山拙斎、会沢正志斎などの指導のもと、多くの藩士やその子弟の文武修業の場となった。明治維新後も、三の丸地区には師範学校や旧制中学など多くの学校が建設され、現在では公立学校や県立図書館、水戸芸術館などが建並ぶ、水戸市の文教地区となっている。また、水戸城址や戦災を免れた弘道館などの建造物を繋ぐ「三の丸歴史ロード」が設定され、弘道館に隣接する三の丸小学校も、外観を武家屋敷風に改築し、歴史的な景観に対応したまちづくりを試みている。

三の丸小学校の2000(平成12)年度の全児童数は383人である。このうち、全生徒数の約25%にあたる90人の児童が、三の丸小学区以外の学区から、あるいは水戸市外から越境入学をしている。

この理由として、南町、泉町といった水戸駅近辺に店舗をもつ商店経営者が、子供とともに出勤し、店舗から最寄りの学校である三の丸小学校に子供を通学させるというケースがあげられる。この他に、水戸市の学校教育において先進的な三の丸小学校に子供を通わせたいという、教育熱心な両親が越境させる場合もある。

三の丸小学校に隣接して位置する三の丸公民館は、三の丸地区のコミュニティの中心としての役割を果たしている。水戸市の公民館は、従前のような社会教育や生涯教育の中心という役割だけでなく、市民生活の中心という位置づけがなされている。行政の介入しない、地域住民自身の手によるコミュニティの発展が期待されているが、施設は完成したものの、それぞれの地区でコミュニティを形成しようという意識はまだ少ない。その中であって、三の丸地区は住民のコミュニティ形成への意識が高く、2001年時点で最も地区コミュニティ活動が盛んな地区の一つである。



写真2 三の丸公民館
(2000年9月撮影)

三の丸公民館では、一般教養講座やクラブ、サークル等の定期講座が行われている。また、町内会や子供会などの三の丸自治コミュニティ連合会の活動なども行われている。

このように、三の丸地区は水戸市のなかでも組織的な地域コミュニティが確立された地域であり、住民同士が地域の中で繋がりを深め、互いに支えあっていこうという意識の強い地区といえる。

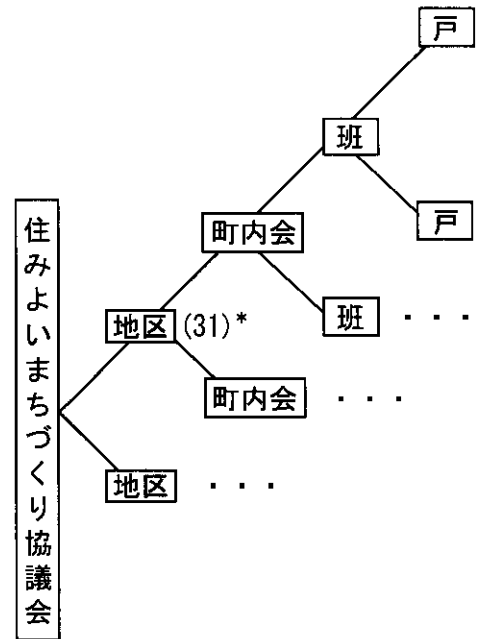
Ⅱ-2 三の丸地区の自治会活動

1) 三の丸地区における自治会の変遷

明治期において水戸市の上市・下市では、「小区」および「大区」という、2重の階層的区分がなされていた⁵⁾。このうち、三の丸地区は第1大区の第1小区にあたり、その中に20の町が含まれていた。1940（昭和15）年、日中戦争における戦時体制下、日本政府は総力戦に備え、市町村に、その下部組織としての町内会を組織させ、協議機関としての常会を設置させた。水戸市においても同様に、町内会が設置され、上部組織としての町内会連合会が6地区に設置された。当時、三の丸地区はこれら町内会連合の1つとして扱われた⁶⁾。町内会は「班」を組織し、それぞれの班に、納税や国債の消化といった経済的側面での機能や、食糧増産や配給、供出、隣人の相互監視といった戦時中における社会生活面での機能を担わせていた⁷⁾。戦後、総力戦体制下の町内会や班は一時解体されたが、実質的にその後の自治組織の基盤となった。

形式的に残った戦中の町内会であったが、1970（昭和45）年に「水戸市民憲章」⁸⁾の制定を期に組織の再編が進められた。それはまず、町内会を基盤とする自治連合会や各市民憲章協議会を設置し、市民憲章の理念を実行する組織として位置付けるといったもの。さらに、自治体から各町内会に自治部や福祉厚生部の機能を移管するというものであった。つまり、行政の最末端機構としての機能が町内会に付与されることとなった。

1994（平成6）年には「水戸市第4次総合計画」が制定され、「生き生きとした文化都市・水戸」を基本構想とした地域住民の自主的な活動によるまちづくりが推進されている。これを受け、1996（平成8）年には、町内会・自治会の上部組織として小学校区を単位とする「コミュニティ」が設置され、自治組織のさらなる再編が進められている。また、こうしたコミュニティ地区を統括する組織として「水戸市住みよいまちづくり推進協議会」（以下、住協と表記）が設置された。2001年現在、水戸市における自治組織は、住協を中心に31



第2図 水戸市における自治コミュニティの組織（1996年～）

（聞き取り調査より作成）

*（ ）内の数字は水戸市全体の自治コミュニティ地区数を示す。

のコミュニティ地区で構成されている（第2図）。地区コミュニティの構成は、市報などを配布する際の単位であるブロック、各地域の組織である町内会⁹⁾、その下に複数の世帯により構成された班となっている。

このように水戸市における自治組織の再編が行われるなか、三の丸地区においては「三の丸自治コミュニティ連合会」が結成された。

三の丸自治コミュニティ連合会は、主に実践部と地域部、コミュニティ主導の活動の3つに分かれる（第3図）。実践部は、総務部、スポーツ・レクリエーション部、福祉厚生部、生活環境部、防災部、広報部の6部門に分かれており、連合会組織を統括する役割を担っている。地域部は、58町内会および女性会、高齢者クラブ、子ども会育成連合会、PTA、食生活改善推進委員会、保健推進委員、婦人防災クラブ、三の丸育成連絡会の8部門に分かれる。¹⁰⁾ 地域部は、各町内会を中心とした

三の丸自治コミュニティ連合会

総務部
スポーツ・レクリエーション部
福祉厚生部
生活環境部
防災部
広報部
(実践部)

58町内会
三の丸地区女性会
三の丸地区高齢者クラブ
三の丸地区子ども会育成連合会
三の丸PTA
三の丸食生活改善推進委員
保健推進委員三の丸支部
三の丸地区婦人防災クラブ
三の丸育成連絡会 (地域部)

県庁跡地周辺整備を考える会
那珂川水辺の環境を守る会
お堀の桜を愛する会
三の丸朝起一番の会
三の丸こだまの会(コミュニティ主導の活動)

*
社会福祉協議会三の丸支部

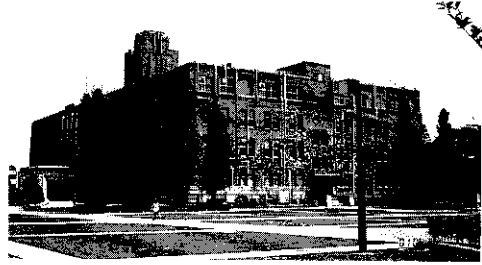


写真3 旧茨城県庁舎
(2001年5月撮影)

第3図 三の丸自治コミュニティ連合会の組織図(2000年)
(「平成10年度三の丸地区各種役員名簿」及び聞き取り調査より作成)

*三の丸こだまの会は三の丸自治コミュニティ連合会と社会福祉協議会三の丸支部の共同の活動である。

実質的な自治活動を担っている。

コミュニティ主導の活動は、主に三の丸地区における具体的な地域問題をその活動の端緒としている。つまり1999年の茨城県庁移転に伴う人口の空洞化問題を解消し、三の丸地区の再活性化を図るための活動であるといえる。県庁移転に関する問題は、コミュニティ連合会が設立する以前から地元有志の間で話し合われてきたが、コミュニティ成立後にはワークショップという形で発展的解消を遂げている。コミュニティ主導の活動には、こうした「県庁跡地周辺整備を考える会」、「三の丸朝起一番の会」、「お堀の桜を愛する会」といった県庁跡地の利用問題に関するワークショップの他、「那珂川水辺の環境を守る会」、「三の丸こ

だまの会」といった生活環境の向上を目的とするものもある。

各活動を見ていくと、「県庁跡地周辺整備を考える会」は、県庁跡地への水戸市役所の移転や娯楽施設を誘致することにより三の丸地区の活性化を図ることを目的として結成された。同会では、県庁舎跡地利用に関する要望書を県に提出したり、また、水戸市に対しては根本町・南町の周辺整備に関する要望書を提出したりなど、具体的な行政への働きかけを行っている¹⁰⁾。「朝起一番の会」は、県庁跡地の利用と周辺の美化、地域住民の交流を目的に週4回、早朝ラジオ体操及び周辺の美化を実施している。

県庁跡地に関するワークショップで最も活発に活動しているのは、「お堀の桜を愛する会」である。同会では、旧県庁舎周辺の再活性化のため、県庁舎の建設当初に植えられた桜の木に着目し、その活用を図っている。具体的な活動は1999年から開始され、毎年4月上旬の3日間、堀の下から桜の木をライトアップする他、来場者に対しては菓子・甘酒等の販売や、写真展等を実施している。こうした活動は、三の丸地区内にとどまらず、茨城県・水戸市といった行政機関、商工会議所、新聞社などからの後援や、その他各種法人からの協賛を受けるなど、各方面へ波及し年々大規模なものへと変化してきている。第1表に示した会員¹⁰⁾の数をみていくと、1999年には195人であったが、2000年には463人と増加しており、事業の拡大が窺える。会員の分布をみていくと、1999・2000年ともに三の丸地区住民のほか、水戸市内に居住する会員が

多いものの、県内外に会員が分布していることがわかる。三の丸地区における会員の比率は、2000年においては減少しているものの、実数では増加している。こうした会員の分布から、三の丸地区における同活動が、地域外も巻き込んだ形で広域化している現状が窺える。

次に生活環境面に関するコミュニティ主導の活動を見ていく。「三の丸こだまの会」は三の丸地区の高齢者介護を目的とした活動を行っている。同会は主に次の3点を活動の契機としている。第1点は、地区内における単身高齢者の増加である。1998年における那珂川の洪水時、三の丸地区の一部住民が公民館や小学校へ避難した。その中に単身世帯の高齢者が多数含まれており、単身高齢者に対する支援の必要性が求められた。2点目は、社会福祉に対する地域の対応への関心の増加であ

る。1998年、水戸市制110周年記念の懇談会において、地域と密接に関り合う福祉の重要性が議論された。3点目はコミュニティ・ケアへの注目である。三の丸コミュニティ連合会では、地域内での助け合い関係に基づいた老人福祉を目指している。以上の点を契機として、三の丸コミュニティ連合会は、社会福祉協議会三の丸支部の協力を得て、ボランティア団体「三の丸こだまの会」を発足させた。同会は、一般的な老人福祉にみられるような、ヘルパーによる訪問介護・訪問入浴などの専門的な技術を必要とする活動は行っていない。その代わりに、送迎や家事、話し相手、レクリエーションの企画といった、従来、近隣住民間でみられたような相互扶助に相当する活動を行っている。当会の活動は、三の丸地区の女性会を通じて登録した8名のボランティアによって開始された。その後、市の福祉広報誌でボランティア会員の募集を開始し、2000年には、ボランティアの登録者数は48名に増加している（第4図）。登録者の分布を見ていくと、三の丸地区内の住人が37人、残りは三の丸地区外の水戸市に住むボランティアであった。ボランティア会員の分布からも、同会の活動が三の丸地区に限定されない、広

第1表 お堀の桜を愛する会の会員の分布と推移（1999～2000年）

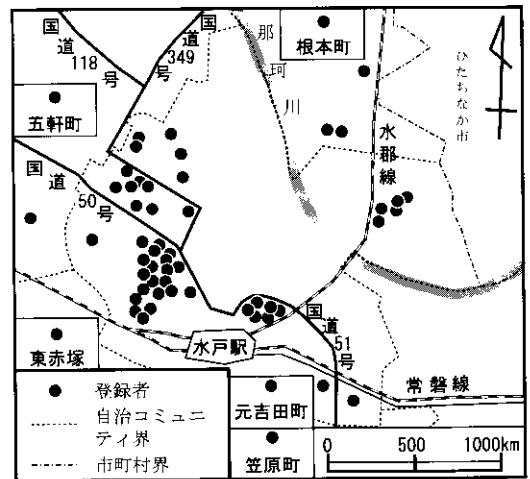
	1999年	2000年
三の丸地区	68 (34.9)	118 (25.5)
水戸市内	90 (46.2)	244 (52.7)
茨城県内	33 (16.9)	98 (21.2)
茨城県外	4 (2.1)	3 (0.6)
合計	195 (100.1)	463 (100.0)

注) カッコ内の数値は小数点第二位を四捨五入したため、その総数は100%にならない。

(お堀の桜を愛する会資料より作成)



写真4 「お堀の桜を愛する会」による桜の木のライトアップ
(2001年4月撮影)



第4図 こだまの会ボランティア登録者の分布（2000年）
(こだまの会資料より作成)

域からの支援者によって支えられていることが窺える。その一方で、ボランティア会員の平均年齢は59.9歳と高く、若年層の参加が少ないという問題点も抱えている。

自地域の住民の積極的な参加により、三の丸コミュニティの自治会活動は活性化している。また「お堀の桜を愛する会」や「三の丸こだまの会」は地域外住民の参加も促しており、水戸市全体へ活動を広域化させている¹⁹⁾。

2) 三の丸地区の公民館活動

水戸市における最初の公民館は、1953（昭和28）年に開設された渡里公民館である¹⁹⁾。1955（昭和30）年には、中央地区、梅香地区の小学校内にも公民館が設置された。さらに1959（昭和34）年には、市民の社会教育向上のため、梅香地区に中央公民館が設立された。その後、水戸市において公民館の開設が相次ぎ、一中学校区につき一つの公民館が建設されるようになった。1976（昭和51）年の「水戸市第2次総合計画」¹⁹⁾からは、公民館の設置が小学校区単位に変更され、1975（昭和50）年には6館であった公民館が、1985（昭和60）年には17館に増加した。こうして地域住民の公民館利用が広まるなか、当時の市長、佐川一信の掲げる「日本一の文化都市の形成」¹⁹⁾を目指した基本方針が「水戸市第3次総合計画（1986年）」に盛り込まれ、公民館の持つ文化施設としての機能

が強化された。その後、小学校の新規開設や、常澄村の合併による小学校の編入（1992年3月20日）に伴って公民館が相次いで建てられ、2001年時点では31館が立地している。一方、元中央公民館は、1994年から水戸弘文カレッジと名称を変更し、市民が居住地区に関係なく利用できる講座や人材研修の場として利用されている¹⁹⁾。

三の丸公民館は、1988（昭和63）年に中央公民館の館名変更により開設されたものである。1994年には梅光から三の丸1丁目の現在地に移転している。三の丸公民館の開設講座は、第2表に示したように「主催事業講座」と「自主学級講座」に大別される。「主催事業講座」は、公民館が企画し講師を招いて開設する講座である。この講座は、地域住民の生涯学習に対するきっかけ作りの場といえる。講座終了後、講座の継続を希望する受講生がいる場合、「主催事業講座」は、そのまま受講生が運営する「自主学級講座」に移行される。講座数は「主催事業講座」が42講座、「自主学習講座」が30講座である¹⁹⁾。講座内容は、両講座とも趣味に関するものが多い。三の丸公民館で開講されている趣味の講座は、写真や民謡をはじめ多岐にわたるが、特に社交ダンスや茶道の講座が多い。一方、生け花・民謡などの講座は、ある程度技術が向上すると退会する受講生が多いため、講座数は減少傾向にある。三の丸公民館では、高齢者や既

第2表 三の丸公民館における開設講座（2000年）

	講座科目	講座数	受講生（人）
主催事業講座	一般教養	7	1,889
	スポーツ・レクリエーション	10	1,099
	趣味	21	7,491
	三世代ふれあい事業	4	2,297
合計		42	12,776
自主学級講座	一般教養	7	—
	スポーツ・レクリエーション	1	—
	趣味	22	—
	三世代ふれあい事業	0	—
合計		30	—

注) 主催講座は受講した延べ人数である。

自主講座の利用者数は不明。

(三の丸公民館資料より作成)

婚女性による利用頻度が高いことから、同世代の嗜好に合った講座を多数開講している。また、高齢化や核家族化といった都市中心部に顕著にみられる諸問題に対応して、高齢者を対象とした「寿大学」や、三世代の交流を目的とした「三世代ふれあい事業」などの、地域ニーズにあわせた独自の講座も開講されている。

水戸市の生涯学習の運営方針は「地域住民のコミュニティ作りの拠点として『地域に開かれた公民館』を目指して、機能の充実に努める。」²⁰⁾とされており、各公民館の属する地域との共催事業に重点が置かれている。三の丸公民館でも、自治コミュニティとの共催行事をほぼ月1回の頻度で実施している(第3表)。

なかでも「三の丸さんさん祭り」は、公民館と地域コミュニティの密接な連携のとれた事業である。この事業は、1983(昭和58)年、地域住民の交流を目的に開催された「芸能祭り」に端を発している。数回にわたる名称の変更の後²¹⁾、1989(平成元)年に現在の名称となった。この「三の丸

さんさん祭り」は、当初地区内の交流を目指していたが、現在では、公民館各種講座の成果の発表や、スポーツ大会、芸能大会、かるた大会を通じて、地域住民の交流を促進するイベントへと発展した。「三の丸さんさん祭り」には公民館・高齢者クラブ・PTA・民生員・子ども会・婦人会・小学校といった三の丸地区の各種団体が協力している。2000年には、1,752人の地域住民が参加した。しかし、コミュニティスケールでの活動が活性化する反面、町内会といったミクロスケールにおける住民の交流の場が減少するという問題も生じている。

次に、三の丸公民館の利用状況を検討する(第4表)。2000年の三の丸公民館の利用者数は42,972人である。この数は、水戸市に立地する31公民館で2番目に多く、三の丸公民館が市内でも頻繁に利用されている施設であることがわかる²²⁾。また、利用回数も一日あたり6.6回と高い。このように、三の丸公民館は頻繁に利用されているが、利用者数は年々減少傾向にある。1999年までの利用者数は5万人を上回っていたが、2002年には4万3千人と大幅に減少した。この減少は県庁の移転に関係している。1999年以前には、県庁舎は三の丸公民館に隣接していた。このため、三の丸公民館は、県庁職員の会議などに頻繁に利用されていた。しかし、2000年の県庁舎の笠原地区への移転により、県庁職員による三の丸公民館の利用は激減し、公民館の利用者数の減少に帰結している。

三の丸公民館の利用者特性として、三の丸地区外の居住者による利用²³⁾が多いことが挙げられる。外部利用者の多さは、三の丸公民館が水戸駅に近く、交通便利性が高いことに起因している。三の丸公民館では、1997(平成9)年から外部利用者に対して、利用回数を月2回に制限している。このため、外部利用者は年々減少している²⁴⁾。しかし2000年に開講された30の自主学級講座のうち、27講座が地域外の居住者を主体とする講座であり、外部者の利用は依然高い。

第3表 三の丸公民館における年間共催行事(2000年)

	行事名
4月	
5月	三の丸地区親善ソフトボール大会
6月	三の丸地区親善ソフトバレーボール大会 花壇作り講習会
7月	介護保険説明会 文化講演会 中央ブロック防災訓練
8月	
9月	三の丸地区お父さんソフトボール大会 三の丸地区リーダー研修視察 三の丸かるた大会及び玩具作り ママさんソフトバレーボール大会
10月	第38回三の丸地区市民運動大会 三の丸地区市民歩く会
11月	三の丸地区総合防災訓練
12月	三世代手打ちそば・正月輪飾りづくり
1月	
2月	三の丸地区インディアカ大会
3月	水戸市制施行110周年記念 三の丸さんさん祭り

(三の丸公民館資料より作成)

第4表 三の丸公民館利用状況（1997～2000年）

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
1997年	153	235	236	224	238	249	241	193	217	237	236	200	2,659
	3,841	4,199	7,034	3,958	4,247	4,655	4,363	3,255	4,019	5,637	4,244	4,356	53,808
1998年	201	226	225	213	218	241	216	182	212	191	206	163	2,494
	4,126	3,876	11,259	3,897	4,425	4,526	4,058	3,384	4,179	3,608	4,023	3,177	54,538
1999年	170	216	194	170	195	208	205	139	185	171	191	173	2,217
	3,622	3,568	11,390	3,178	3,918	4,030	3,543	3,369	3,694	3,227	3,854	3,493	50,886
2000年	169	204	190	139	169	184	190	152	167	170	179	166	2,079
	2,914	3,519	6,867	2,542	3,261	3,598	3,582	2,713	3,393	3,532	3,475	3,576	42,972

図中の数値は（上）利用回数、（下）利用者数を示す。

（三の丸公民館資料より作成）

Ⅲ 友人ネットワークによる住民の類型化

Ⅲ-1 アンケート調査の概略

本研究の目的を達成するため、2001年5～6月にかけてアンケート調査を実施した。このアンケートは三の丸コミュニティの現状、および友人ネットワークの空間的特性の解明を目的としており、具体的には、1) 回答者の属性、2) 地域活動への参加状況、3) 友人・知人の数、居住地、および知り合ったきっかけ、4) 友人との交流頻度・交流場所、の4項目を質問している（資料1）。住民の居住地や属性が均等になるよう、58自治会中6自治会を選定し、各自治会に全数調査の形でアンケートを配布した。また、その他4自治会に対しても部分的に配布している。配布総数は530世帯1,590枚であり、うち109世帯168名から回答を得た。回収率は20.56%であった。

回収したアンケートの内訳は、性別では、男性79名、女性89名である。年齢構成をみると、10代4名、20代18名、30代17名、40代20名、50代28名、60代46名、70歳以上35名であり、中高年層が若干多い。これは三の丸地区全体の年齢構成を反映している。また町内会別では、下梅香8名、仲町東部7名、南町2丁目24名、城南睦会27名、柵町2丁目40名、水府町47名、宮町10名、大町2名、三の丸2名、奈良町1名である。

Ⅲ-2 住民の類型化

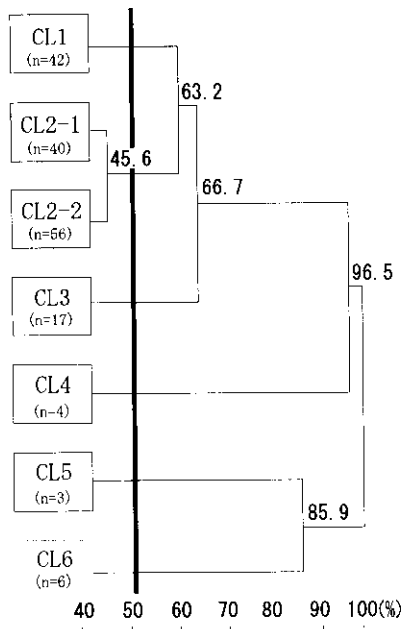
アンケートの分析は、以下の手順で行った。ま

ず、三の丸住民の交友範囲や交友関係を考察するため、友人の居住地と知り合ったきっかけに関する8変数を選定した（第5表）。続いて、これらを基にクラスター分析を実施し、住民の類型化を試みた。最後に、住民の個人属性や社会属性、地域活動への参加状況を考察することで（第6表～第8表）、各類型の特徴を整理した。

クラスター分析の結果、170の住民は、6つの類型と2つのサブ類型に類型化された（第5図）。個人属性（性別、年齢）、社会属性（就業・就学状況、居住年数、以前の居住地）、および地域活動への参加状況（自治会活動、コミュニティ活動、公民館講座）を類型別に検討した結果、各類型の特徴は、以下のように整理された。

1) 類型Ⅰ

類型Ⅰは該当者が42名であり、自宅近隣に友人が多い点の特徴に挙げられる。しかし友人と知り合ったきっかけは職場関係9.1%、学校15.5%、コミュニティ活動26.8%、PTA9.7%、公民館講座8.1%であり、コミュニティ活動と学校が若干高いものの、多岐にわたる構成を示す。このことから、類型Ⅰは、三の丸地区において、幅広い交友関係を形成している人々を示す類型と判断できる。類型Ⅰは中高年層の割合が高く、仕事をリタイヤした人が全体の70%を占める。また三の丸での居住歴も、平均41.9年と長い。さらに自治会活動、コミュニティ活動への平均参加数も比較的多く、自治会活動が2.60、コミュニティ活動が2.48である。類型Ⅰは、三の丸地区に長年居住してお



第5図 クラスター構造
図中の数値は情報損失量(%)を意味する。

り、退職した後、率先して地域活動を行っている人々を意味すると判断される。

2) 類型Ⅱ-1

類型Ⅱ-1は該当者40名であり、友人の半数は遠方に居住している点に特徴がみられる。友人のうち水戸市内居住者は半数のみである。この類型は、就業者が全体の46%に達しており、地域との接点は少ないといえる。また、居住年数は平均も25.9年と比較的短い。しかし、三の丸地区に居住する友人は12.5%であり、同じ就業世代に該当する類型Ⅱ-2やⅢに比べ、若干比率が高い。また地域活動の参加に関しても、自治会活動が2.20、コミュニティ活動1.90であり、比較的高い値を示している。このことから、類型Ⅱ-1は、就業こそしているが、比較的地域に根づいたネットワークを形成する人々からなる類型と考えられる。

3) 類型Ⅱ-2

類型Ⅱ-2の該当者は56名で、類型Ⅱ-1と同様に近隣に友人は少なく、その多くは水戸市外居住者である。また、就業者が多い点も類型Ⅱ-1

と類似する。ただし、友人の約70%が就学時代の級友であること、また20~30代の若年層が約半数を占めることが、この類型の特徴である。さらに、地域活動への参加経験を持たない人が全体の90%以上に達する点も、類型Ⅱ-1との相違点である。

4) 類型Ⅲ

類型Ⅲも類型Ⅱと同様に、就業の割合が77%と高い。また水戸市内に居住する友人は57.6%に留まり、同町内会の友人に至っては僅か0.6%である。さらに、地域活動への参加経験者は、平均で自治会1.35、コミュニティ0.35と極めて低い。一方、類型Ⅱ-2との相違点は、友人と知り合ったきっかけである。類型Ⅲの場合、友人の85%は職場関係の仲間である。この差異は、類型Ⅲの該当者の53%が市外からの移転者であり、三の丸における居住年数が少ない点に起因すると推測される。該当者は17名である。

5) 類型Ⅳ

類型Ⅳは、友人の91.7%が三の丸地区内に居住しており、その全員が職場関係の友人である。この類型は60歳以上の中老年者が多く、また、全員が現在就業中である。該当者の勤め先は、全て三の丸地区内である。平均居住年数は28.5年と比較的短い。類型Ⅳの該当者は4名のみであり、2年以内が1人であるのに対し、40年以上が3人と、長期居住者が目立つ。ただし地域活動への参加経験者は僅かである。出身地は水戸市外が多く、三の丸地区は1人のみである。つまり類型Ⅳは、外部から転入し、三の丸地区で長期間働いている就業者を示す類型と判断できる。外部からの転入者でかつ現在就業中であることから、三の丸地区に職場関係の友人が多いが、仕事以外での友人はみられない。

6) 類型Ⅴ

類型Ⅴは、友人がすべて同町内に居住しているという点に特徴が見られる。また、友人はすべて、自治会活動を介して知り合った人々である。この類型の該当者は全員60歳以上の女性であり、就業はしていない。現在地における居住歴は54.0

第5表 三の丸地区における住民の類型別友人ネットワーク

	該当者 (人)	友人関係 (入力変数)								平均 友人数
		友人の居住地 (%)			友人と知り合ったきっかけ (%)					
		市内	三の丸	町内会	職場	学校	コミュニティ	PTA	サークル	
類型Ⅰ	42	85.4	55.6	41.6	9.1	15.5	26.8	9.7	8.1	9.5
類型Ⅱ-1	40	50.1	12.5	7.0	4.0	12.7	12.7	13.8	23.4	12.8
類型Ⅱ-2	56	43.0	10.3	4.6	21.2	69.7	1.5	3.0	5.4	8.1
類型Ⅲ	17	57.5	1.4	0.6	85.0	1.8	0	5.7	2.0	7.2
類型Ⅳ	4	100	91.7	46.7	100	0	0	0	0	5.8
類型Ⅴ	3	100	100	100	0	0	100	0	0	3.3
類型Ⅵ	6	92.4	69.4	52.0	0	0	25.0	5.6	88.1	9.7

(クラスター分析結果より作成)

第6表 住民属性の平均値 (類型別)

	性別 (%)		年齢 (%)						
	男性	女性	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上
類型Ⅰ	38.1	61.9	0	2.3	0	2.3	16.6	40.5	38.1
類型Ⅱ-1	45.0	55.0	0	2.5	10.0	17.5	22.5	30.0	17.5
類型Ⅱ-2	51.8	48.2	7.1	23.2	21.4	17.9	12.5	12.5	5.4
類型Ⅲ	82.4	17.6	0	5.8	5.8	11.8	29.4	35.3	11.8
類型Ⅳ	75.0	25.0	0	25.0	0	0	0	50.0	25.0
類型Ⅴ	0	100	0	0	0	0	0	33.3	66.6
類型Ⅵ	0	100	0	0	0	0	0	33.3	66.6

(クラスター分析結果より作成)

第7表 住民の社会属性 (類型別)

	就学・就業者 (%)			平均居住 年数 (年)	居住歴			
	就業者比率	就学者比率	なし		以前の居住地 (%)			
					移動なし	三の丸内	市内	市外
類型Ⅰ	30.9	0	69.1	41.9	26.2	4.7	30.9	38.2
類型Ⅱ-1	46.0	2.5	52.5	25.9	22.5	5.0	30.0	42.5
類型Ⅱ-2	76.8	8.9	14.3	31.3	28.6	7.1	21.4	42.9
類型Ⅲ	76.5	0	23.5	26.5	17.6	0	29.4	52.9
類型Ⅳ	100	0	0	28.5	25.0	0	25.0	50.0
類型Ⅴ	0	0	100	54.0	66.6	0	0	33.3
類型Ⅵ	0	0	100	48.2	50.0	0	16.6	33.3

(クラスター分析結果より作成)

第8表 三の丸における住民の地域活動参加状況 (2001年)

	参加自治会 活動数	参加コミュニティ 活動数	参加公民館講座 (%)		
			なし	主催講座	自主講座
類型Ⅰ	2.60	2.48	61.9	23.8	23.8
類型Ⅱ-1	2.20	1.90	62.5	17.5	30.0
類型Ⅱ-2	1.57	0.84	91.1	1.8	7.1
類型Ⅲ	1.35	0.35	94.1	5.9	0.0
類型Ⅳ	1.75	1.25	75.0	25.0	25.0
類型Ⅴ	3.00	3.00	33.3	66.7	33.3
類型Ⅵ	3.00	3.50	16.7	66.7	50.0

・参加自治会・コミュニティ活動数とは、これまでに参加したことのある各種活動数の類型別平均値を示す。

・参加公民館 (%)とは、今までに各種公民館講座に参加経験のある人の割合 (%)を示す。

年である。三の丸出身者が全体の67%を占める。つまりこの類型は、三の丸に長期間居住する、年配の主婦層を示している。地域活動に関しては、町内会・コミュニティともに平均3.0の活動に参加しており、公民館講座への参加率も主催講座66.7%、自主講座33.3%と極めて高い。以上のことから、類型Vの人々は、地域に根差した友人ネットワークを形成していることが窺える。

7) 類型VI

類型VIは、友人のほとんどが自宅周辺に居住している点、また該当事者が年配の女性で、三の丸での居住歴が長い点が、類型Vと類似する。両類型の差異は、類型VIにおける友人の多くが、公民館講座等のサークルの仲間という点である。しかし公民館講座の受講生は基本的に近隣住民に限られており、実際にはサークル仲間と町内会の仲間が重複するケースが多い。類型VとVIの該当者は、ほぼ同一の性格を有していると判断できる²⁹⁾。

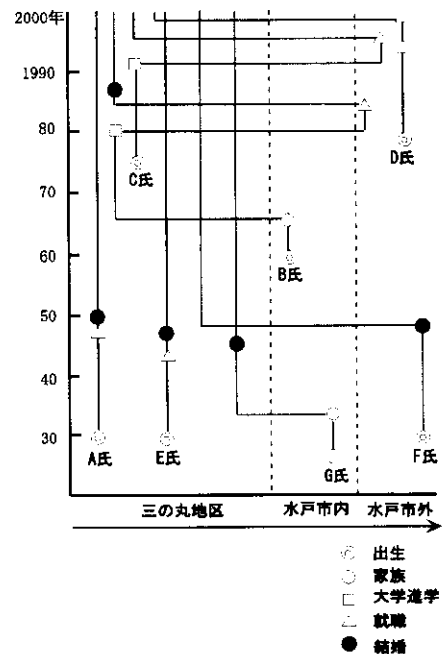
IV 類型別にみた友人ネットワークの空間パターン

前章では、友人との交友範囲から三の丸住民の類型化を行った。その結果、6つの類型と1つのサブ類型が抽出され、類型間には被験者の年齢や性別、出身地、通勤・通学先等の属性に明確な差異が存在することが明らかになった。特に、被験者の年齢と交友範囲には強い相関が窺える。一般に、友人は出生地や学校、仕事場など、各人の日常生活の中で形成される。一方、転居や転職、結婚などの日常生活の変化は交友関係の再編を促し、以前の友人との交流関係が疎になる反面、新たな友人とのネットワークが結ばれる。つまり、交友関係は被験者のライフパスの影響を強く受けると推測される。第6図は本章で事例とした6氏のライフパスを示したものである。本章では、各被験者の交友関係とライフパスとの関係の考察を試みる。

IV-1 類型Iの事例 (A氏)

A氏は73歳の定年退職者である。同氏の家は、父親の代から約100年間三の丸地区に居を構えて

おり、彼自身も、三の丸地区内の小・中学校を卒業している。中学卒業後、氏は市内の工業高校に進学したが、高校進学後数ヶ月で第二次世界大戦を迎えたため、学業半ばにて日立兵器勝田工場に徴用された。勝田工場には三の丸の自宅から通った。しかし、1945年からの5年の間、A氏は三の丸外の水戸市にある親戚の家へ疎開している。これは、同年の勝田市内への艦砲射撃と水戸市街への空襲により、A氏が三の丸から焼け出されたためであるが、彼が三の丸地区を離れたのはこの期間のみである。疎開後は、現在に至るまで三の丸の現住所に居住している。疎開中、1年間の日雇い労働を経験したが、1947(昭和22)年には三の丸地区に隣接する五軒地区の自動車修理工場に就職し、以後定年退職するまでの43年間、同社に勤務している。また1951(昭和26)年には茨城県岩瀬町出身の女性と結婚し、子どもをもうけている。現在は子ども達が独立しているため、妻と2人で居住している。



第6図 三の丸地区居住者のライフパス (2001年)

(聞き取りより作成)

A氏が挙げた友人の総数は10人である。A氏自身、居住地移動がほとんどなく、また勤務先も三の丸隣接であったため、友人の分布も三の丸およびその周辺に限られている（第7図）。三の丸地区に居住する友人は8名で、うち3人は小学校以来の幼なじみである。彼らとは、現在でも老人会活動等を通して頻りに交流をはかっている。また氏は町内のまとめ役であり、自治会・町内会活動、地域コミュニティ活動にも役員として参加しているが、こうした活動を通じて、友人関係が構築されている。コミュニティ関連の活動を通じての友人は5名である。彼らもまたコミュニティ活動に積極的に参加しているため、複数の活動においてA氏と面識を持つ機会を有している。A氏と彼らとは、月に数回会合で顔を合わせる以外にも、茶飲み友だちとして週に1・2回自宅を往来している。さらに氏は、友人として職場の元同僚2名を挙げている。氏が勤務した自動車整備工場は大手自動車メーカーの系列会社となっており、現在は五軒地区から市内笠原地区に移転している。同僚の1名は会社の移転に伴い、三の丸地区から移転しており、もう1名は、定年退職を期に水戸

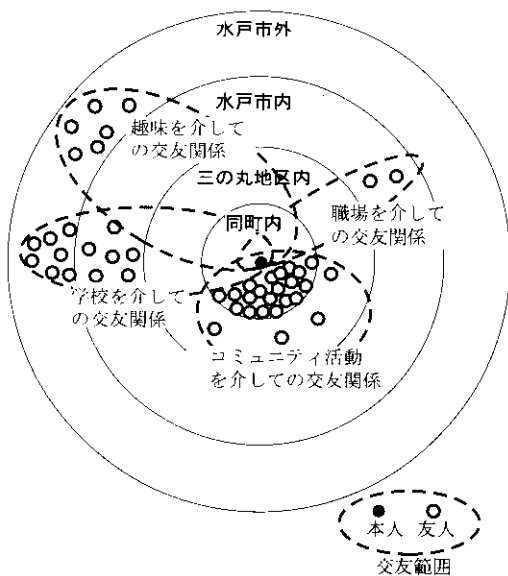
市外へと転居している。そのため、彼らとは年に1・2回会食する程度の付き合いである。

A氏の居住している町内は、三の丸地区の中でも住民移動の比較的少ない地区である。同町内は空襲による被害を受けたが、A氏をはじめ町内の人々の多くは、終戦後同町内に戻っている。このため、町内における住民同士の結びつきは強い。この町内では、A氏のみならず多くの住民が自治会・町内会活動に積極的に参加している。こうした密度の濃い近隣とのつながりは、地縁関係を大切にしているという枠を越えて、共に辛苦を舐めたという同志的な関係により生じていると推測される。また前述したように、同町内では住民の移動も少ないため、幼なじみがそのまま自治会・町内会、老人会の付き合いへと継続していることも、A氏における友人関係の特徴である。このような、一人の人物が友人という枠を越え何役も兼ねるといった傾向は、三の丸地区に長期間居住している類型Ⅰの住民に顕著にみられる。

Ⅳ-2 類型Ⅱ-1の事例（B氏）

B氏は水戸市内に勤める40代の公務員である。三の丸地区で生れ、幼少期の4年間は一時市内の他地区に転居したが、小学校4年生からは三の丸地区に居住して、以後県内の高校を卒業するまで同地区で過ごした。その後、大学進学に伴って県外に転居した。大学卒業後水戸市内に就職するにあたり三の丸地区へ戻った。以後20年間居住地は変わっていない。公務員として家計を支える一方、主に茨城県内居住者で構成される趣味のサークルに所属し活動を行っている。また、居住する町内会の役員を務め、町内会や公民館が主催する各行事に参加している。さらに、子供の就学期には三の丸小学校のPTA役員を務めて各行事に参加するなど、各種のコミュニティ活動にも参加している。

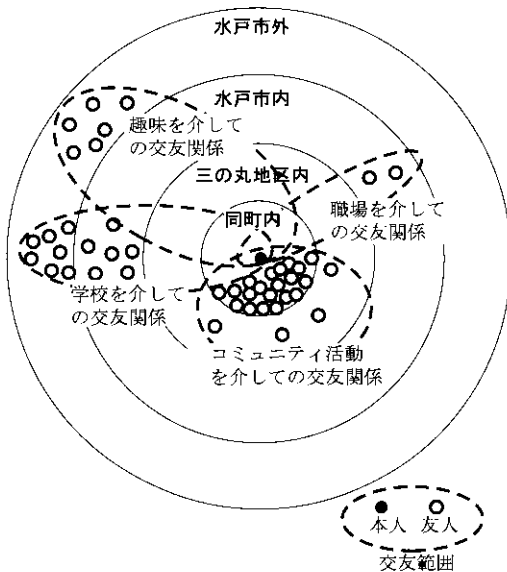
B氏が友人として挙げたのは40名あまりである。友人の居住地は、水戸市外が13名、水戸市内が30名、そのうち三の丸地区内が24名である。また、同地区内の友人のうち、20名が同じ町内に居



第7図 A氏の交友関係（2001年）
（聞き取り調査より作成）

住している（第8図）。同町内出身のB氏には近隣の友人が多く、公民館主催のスポーツ大会や、近隣町内会と合同で運営する御輿の会への参加を通じて、それぞれ年に数回程度交流をもつ。同地区内のうち同町外の友人4名は、かつて役員を務めていたPTAの活動を通じて知り合った友人であり、定期的ではないが現在も交流がある。三の丸地区以外の水戸市内に居住する友人は、8名である。そのうち6名は中学あるいは高校生時代からの友人であり、定期的ではないが、それぞれ年に1～2度会って親睦を深めている。その他の2名は、職場の同僚である。水戸市外に居住する友人は、13名である。内訳は、三の丸地区外の小学校で知り合った友人が1名、高校あるいは大学時代からの友人が7名ほどおり、いずれも不定期で年に1～2度集まっている。さらに、趣味のサークルを通じた友人が5名おり、月1回の定例会のほか、不定期に任意で活動を行い、家族ぐるみで付き合う友人もいる。特に、サークルの友人の一人は、小学生の頃からの友人とともに、B氏が挙げた友人の中でも特に親しい友人の一人である。

B氏の友人の居住地は町内から市外まで広い範



第8図 B氏の交友関係（2001年）
（聞き取り調査より作成）

囲に広がる。町内や三の丸地区内といった近隣地域の友人が相対的に多いのは、B氏が長く同一地域に居住する中で形成されたネットワークが、同氏とコミュニティとの結びつきを強めたためと考えられる。また、同氏が既婚者であることが、家族を通じた近隣地域住民との接触など、近隣地域の友人と知り合うためのより多くの機会を提供している。一方で、同氏は居住地の近隣におけるネットワークとは別に、学生時代からの友人、職場や趣味を通じた友人など、三の丸地区外や水戸市外にも友人が多い。このような、近隣地域以外におけるネットワークの存在は、就業世代に共通した特徴である。

Ⅳ-3 類型Ⅱ-2の事例（C氏）

C氏は20代の未婚女性就業者である。現在、三の丸地区内の自宅で両親と同居しており、自宅から同地区内の金融関連会社に通勤している。彼女は幼少の頃より三の丸に居住しており、幼児期に同地区内で転居しているものの、現住所には22年間居住している。彼女は市内の小・中・高校を卒業した後、都内の短大に進学している。この短大在学中の2年間で、彼女が三の丸を離れた唯一の期間である。短大卒業後、C氏はIターン就職により三の丸地区の企業への就職し、実家に戻っている。

C氏は友人を10名挙げているが、うち市内在住者は1名のみである（第9図）。友人の多くは短大時代の知り合いで、茨城県外の居住者である。彼女たちとは年に数回都内に集まり、日帰りで買い物等を楽しんでいる。一方、職場を介しての友人は3名で、いずれも社内サークルの仲間である。さらに、水戸市内で開講されている「茶道教室」を介した友人も、2人ほど挙げている。

C氏が挙げた最も親しい友人2名のうちの1人は、短大時代の学友である。彼女は都内に在住しているため、年に4回程度、一緒に買い物や旅行をすることで交流を維持している。もう一人の友人は職場の同僚である。この友人はC氏より年長であるが、社内サークルを通じて親しくなった。

彼女は水戸市外に住んでいるが、配置部署もC氏と同じであるため、2人はほぼ毎日顔をあわせている。

C氏における友人関係の特徴として、三の丸に住居する友人がわずかである点が挙げられる。彼女は三の丸に長く居住し、就学・就業も基本的に三の丸地区内で行っているが、友人の大半は県外居住者である。彼女は就業しているため、コミュニティ活動には参加していない。町内会活動の経験は、就学時における「子ども会」への参加のみである。また、以前は公民館主催講座を受講していたが、勤務時間の関係上、受講が困難となったため、現在では講座の受講も断念している。さらに、C氏は趣味として社内サークルに参加しているが、そこでの友人は職場の延長上の付き合いであるため、会社の枠を越えた友人関係は構築されていない。そのため、C氏の友人で三の丸在住者は、彼女が個人的に通っている市内の習い事教室の仲間一名のみである。一般に、地方都市に居住する若者の多くは、高校卒業後、進学・就職のため出身地を離れ、都内等に移転する。実際に、C氏の中学・高校時代の友人の多くは、現在県外に

居住している。また女性の場合、結婚を期に転居するケースも多い。C氏は現在、小・中・高校時代の友人と一切交流を持っていない。C氏におけるこうした友人関係は、地方都市に居住する未婚の女性で、かつ就業中であるという彼女の属性に大きく起因すると推測される。

Ⅳ-4 類型Ⅲの事例(D氏)

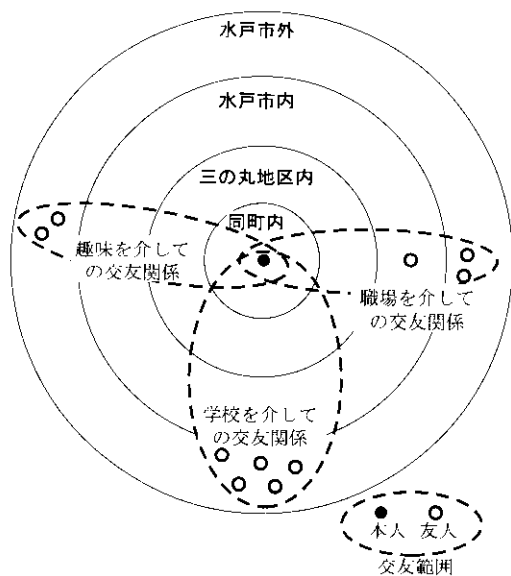
D氏は20代の独身男性で、神奈川県相模原市の出身である。大学卒業後、大手の小売企業に就職し、1999年に仕事の関係で三の丸地区に移転した。現在は三の丸の社員寮で生活している。彼は水戸市外の出身で、かつ就業しているため自治会活動には参加していない。また、数年後には転勤する予定であり、地域との接点はほとんどない。

D氏が挙げた友人の総数は30名である。うち水戸市内居住者は10名で、この10名はいずれも同じ社員寮に住む同僚である(第10図)。友人の内訳は、職場仲間が15名、学校時代の友人が15名であった。学校時代の友人は遠方に居住しており、職場仲間のうち5名も、やはり水戸市外である。彼が特に親しい友人は2名で、うち1人は学校時代に知り合った20代の男性である。彼は現在都内に在住しており、D氏は月に1回のペースでこの友人宅を訪れている。もう1人は、職場を介して知り合った20代の女性である。彼女も県外に居住しており、主に東京都内で、月1回のペースで顔を合わせている。

D氏の友人の大半は、県外居住者である。また、三の丸に住居する友人も全て彼と類似する属性の人々であり、地域住民との接点はみられない。D氏の場合、居住地は三の丸であるが、友人のネットワークは県外を中心に形成されている。

Ⅳ-5 類型Ⅳの事例(E氏)

E氏は、建設業を営む70代の男性である。同氏は、古くから三の丸地区に居を構える家に生まれ、その後も一貫して現住地に居住し続けている。10代で現在の水戸市元吉田にあった旧陸軍の技術養成学校に通った。その後、旧海軍に入隊し



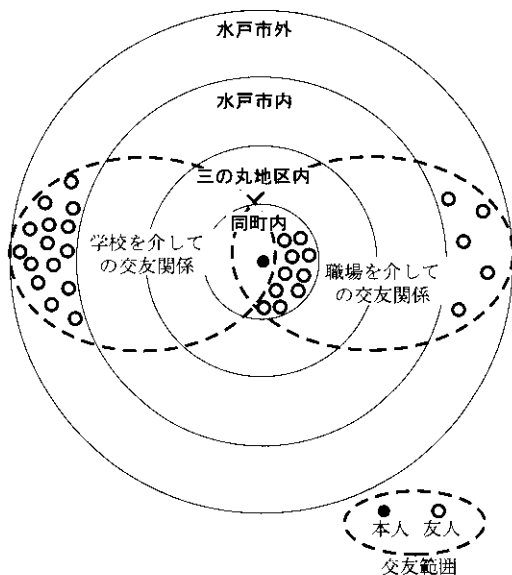
第9図 C氏の交友関係(2001年)
(聞き取り調査より作成)

18歳のときに敗戦を迎えた。復員後、水戸市と近郊の建設業者によって設立された建設業組合が運営する職業訓練学校で技術を身につけ、建設業を興した。取引先は水戸市内が中心で、戦後の住宅需要の高まりを背景に順調に経営を続け、同氏は現在も建設業を経営するとともに現役の職人でもある（第11図）。同氏の居住する地域は、従来、三の丸地区の中でも、通勤者よりも自営業者や職人が比較的多い地域であり、同業者同士の結びつきが強い地域であった。同氏も同業者や関連業者など、仕事上の取引を通じて知り合った友人との付き合いが多い。元山町（町域再編により現在は常盤町）出身の妻と知り合ったきっかけも仕事上の結びつきである。また、同氏は町内会長を務めて自治会活動に参加しているほか、東照宮の氏子総代を努めるなど、近隣地域住民の代表として地域コミュニティと深い関わりをもっている。

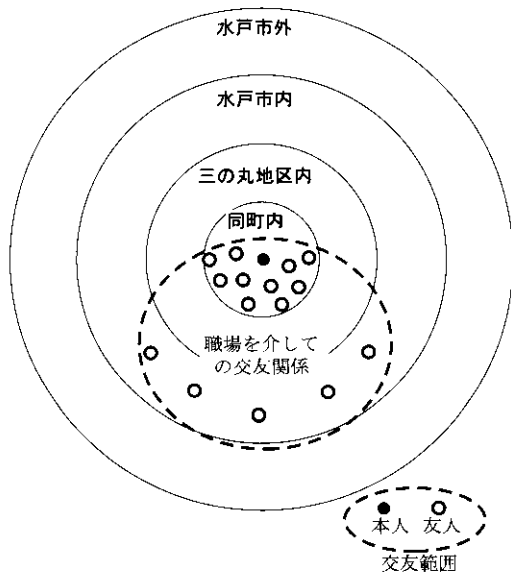
E氏が挙げた友人は15名である。いずれの友人も水戸市内に居住している。このうち三の丸地区の中でも同じ町内に居住する友人が10名である。友人は全て建設業者やその関連業種に携わる同年代の自営業者や職人であり、同氏の仕事上の取引

や建設業組合の活動を通じて知り合った。月に数回水戸市内で集まって親睦を深めている。近隣に居住する幼い頃からの知り合いや、水戸市内に住む旧陸軍の技術養成学校で知り合った同窓生とは現在はあまり付き合いがない。また、同氏は町内会長であるため、会合への参加、夏祭り（現在は少子化の影響で開催されていない）や子供会の旅行の引率など、町内会主催の各種行事には参加するものの、それ以外では近隣住民との付き合いは冠婚葬祭の時に限られ、普段の生活ではそれほど親しい付き合いはない。

E氏の友人の居住地分布は、全てが三の丸地区または水戸市内であり、比較的狭い分布パターンを示している。また、友人の社会的属性は、いずれもが同年代の同業者か関連業者であり、非常に限定的な属性を有している。生まれたときから同じ場所に居住しつづける同氏には仕事を通じて知り合った知人以外にも、町内や市内に古くからの知り合いが存在し、また、町内会長としてコミュニティ活動に参加するなど、近隣地域の住民と接触する機会を持つ。しかし同氏はそれらの知人とは親しい付き合いはなく、友人関係において近隣



第10図 D氏の交友関係（2001年）
（聞き取り調査より作成）



第11図 E氏の交友関係（2001年）
（聞き取り調査より作成）

住民との単なる地縁的關係は重要性を持っていない。同氏の友人關係においては、仕事上の關係によって形成されたネットワークが極めて重要な位置を占めている。このような特徴は、地域に密着した業種に長く従事してきた人々に特有のものである。

Ⅳ-6 類型Ⅴの事例 (F氏)

F氏はA氏の妻にあたる70代の女性である。出身は茨城県岩瀬町だが、結婚を契機に現在地に移転した。当地区に約50年間居住しており、長らく水戸のJA経済連に勤務したが、居住地は変更していない。現在は仕事を引退し、夫とともに自治会長を始め、多くのコミュニティ活動に尽力している。また公民館講座も多数受講しており、近隣住民との交流が多い。特に、彼女の居住する地区は三の丸でも古い住宅街であるため、住民同上、特に主婦層の結束力は強い。そのため自宅には毎日のように近所の人々が集まり、F氏はコミュニティにおける結节点的な役割を果たしている。

F氏が挙げた友人は28名である。友人の居住地は、水戸市外が3名、水戸市内が25名、同町内が11名であり、近隣への集中が顕著である(第12図)。同町内に居住する友人は、公民館のサークル仲間が4名、自治会活動を通じた仲間が6名である。彼女たちは自宅が近いこともあり、互いの家や三の丸公民館で毎週のように顔を合わせている。また、三の丸外の水戸市内に住む友人は14名である。うち6名は、以前勤めていたJA経済連を介して知り合った友人であり、彼女たちとは市内において、年に数回集まっている。またF氏夫妻が仲人をした友人も4組ほど市内に住んでおり、彼らとも年に数回は会っている。一方、水戸市外の友人はいずれも、尋常小学校時代の友人である。彼女たちは結婚を契機に茨城県ひたちなか市や神奈川県など県内外に分散しているが、正月やお盆で岩瀬町に帰省した際に皆で集まり、交流を深めている。

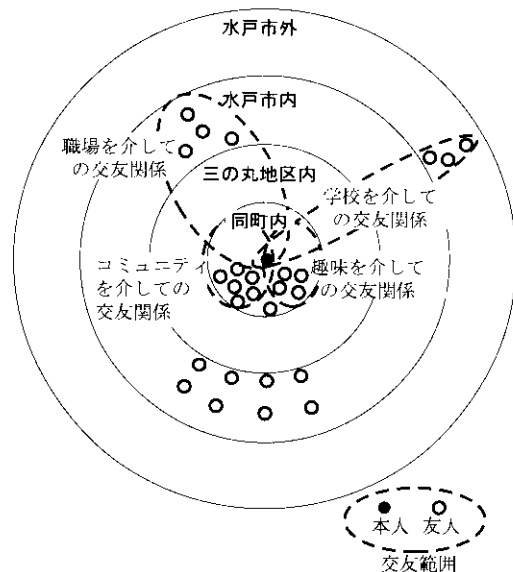
F氏には水戸市外に居住する就学・就業時期の友人もいるが、その数は僅かであり、現在の友人

の大半は同町内に住む自治会やサークルの仲間で占められる。女性の多くは結婚を契機に出身地を離れるため、結婚以降は、夫の居住地を中心に交友關係が再構築される。しかし女性の場合、PTAや婦人会を通して早くから地域住民との接点が生まれるため、男性転入者と比べると地域に根づくのが早い。実際F氏は、町内に居住する友人数は、同地区出身の夫のA氏を上回る。

Ⅴ 友人ネットワークの空間的特性

Ⅲ章およびⅣ章において、三の丸地区に居住する住民の友人ネットワークを検討してきた。個人がどのような友人ネットワークを持つのかという問題は、個人のライフパスと密接に関連する。まず本章ではⅢ章で示した各類型を個人属性のうち特に年齢の点から整理する。

年齢と友人ネットワークの空間分布の關係を見た場合、はっきりとした2つの傾向が見られる。まずひとつは、年齢が高い人の多い類型Ⅰ・類型Ⅳ・類型Ⅴ・類型Ⅵは、いずれも三の丸地区内の友人数が最も多いという点。もう一点は、年齢層が低い類型Ⅱ-1・類型Ⅱ-2・類型Ⅲでは、水



第12図 F氏の交友關係 (2001年)
(聞き取り調査より作成)

戸市外および三の丸地区以外の水戸市における友人数が最も多いという点である。年齢が高くなるにつれ、居住地の周辺に友人ネットワークが集中していく傾向がわかる。友人関係形成のきっかけを見ると、年齢層が高い類型では職場やコミュニティ・サークル活動が形成のきっかけであり、年齢層の低い類型では学校、職場、PTAがそのきっかけとなっている。IV章の事例研究からもわかるように、後者のうち特に類型Ⅱ-1および類型Ⅱ-2では、水戸市外での友人が学校を通じて築かれるものであることを示している。すなわち年齢が高くなるにつれ、友人関係の形成は学校から職場、職場から地域活動を主体とするものへと変化し、友人の分布は居住地の近隣に集中していく傾向があるといえよう。

次に都市中心部という三の丸地区の地域的条件と友人関係の空間パターンについて考察する。上記のように友人関係が形成される機会は、大きく学校・職場・地域活動の3時点である。三の丸地区の地域的条件を、こうした友人関係の選択機会を左右する問題として考えたい。

まず友人形成の機会としての学校は、三の丸地区内だけでも高等学校3校、中学校1校、小学校2校存在する。三の丸地区以外の学校に進学する場合も含め、特に高等学校を通じて水戸市外に広範囲に友人を獲得する機会は数多く開かれている。小学校においても、三の丸地区外の水戸市や他市町村からの越境入学を認めている。三の丸地区のこうした条件が若年層における広範囲な友人関係を支えているといえよう。

職場を通じて友人関係を獲得するパターンは多岐にわたる。地区出身者で自営業を営むもの、中心業務地区で働くもの、他の地区へ通勤するもの、水戸外出身者社員寮で生活するものなど、様々な住民が混在して居住している。自営業であれば、生活の大半を居住地域で過ごし、仕事上でも顧客や商店街などを通じた近隣との交際数が増加する。一方、地区外に通勤している場合では、友人ネットワークも職場の立地に応じて広範囲に分散する。また類型Ⅲのように、地区外出身で職場

が三の丸にある人は、かつての学校での友人関係を市外に維持する一方で、三の丸においては職場を通じた交際数を増加させていく場合もある。三の丸地区には、かつて県庁が立地し、現在でもCBDや商店街、大型百貨店など都市の中心機能が集中して立地する地域であるため、友人関係形成の数多い機会に恵まれているといえる。またそうした都市の高い中心性が、広範囲にわたる友人関係の継続を支えているといえよう。

最後に地域活動を通じて友人関係を形成するパターンを考察する。先に述べたように、年齢が高くなるにつれ友人関係の空間的範囲は近隣に集中する傾向がみられる。こうした場合、地域活動への参加が友人関係の形成にとって、ますます重要な役割を果たすといえる。II章でみたように、三の丸地区の地域活動は、地区の公民館を中心として活発に行われている。自治関連では、三の丸自治コミュニティ連合会や各種のワークショップ、ボランティア活動が、公民館活動では主催講座やサークル活動の場が住民に対して開かれている。こうした地域活動が活発な背景には、やはり中心市街地という公民館の立地条件の良さがある。三の丸公民館は水戸駅に近接していることから、他地区や他市町村からも多くの利用者を集めている。

公民館活動の講座やサークル活動は、主に同好の仲間を集める絶好の機会であるといえるが、継続した活動を行うためには人員の確保が必要となる。利便性の良い公民館は、高齢化の進む都市中心部において、フィッシャーの述べる下位文化を形成する上で重要な結節点であるといえる。公民館との関わりから空間的にも広範なネットワークが形成される機会がもたらされ、公民館を利用しつつその維持が図られている。

VI おわりに

本論文では、都市中心部に居住する住民が構築する友人ネットワークの特性を、住民の年齢、性別、出身地、通勤・通学地、居住年数などの属性と交友範囲や交友の機縁との関係を通して分析し

てきた。

研究対象地域には水戸市三の丸地区を選定した。当地区は旧水戸城の城郭内に位置し、地区内には1999年まで茨城県庁が置かれ、地方裁判所や県立図書館が立地するなど、水戸市のみならず茨城県の官公庁施設の集積地である。また南町付近は水戸市の商業中心地区であり、都市中心部の研究事例として適当である。

アンケート調査の結果を基に、被験者の交友範囲や交友関係を分析するため、友人の居住地と知り合った機縁に関する8変数を選定して、クラスター分析を実施し、住民を7（サブ類型を含む）類型に分類した。個人属性（性別、年齢）、社会属性（就業・就学状況、居住年数、以前の居住地）、および地域活動への参加状況（自治会活動、コミュニティ活動、公民館講座）を類型別に検討した結果、以下のことが明らかとなった。

第一に、友人ネットワーク空間の形成要因の中で最も重要なものは、個人のライフパスである。

友人ネットワークの空間的範囲からみると、自地区内の自宅近隣で友人数が卓越する類型が4つ（類型Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ）みられた。彼（女）らのライフパスは各人各様であるが、事例として分析したA・E・F氏の場合、いずれも60歳以上と高齢であり、三の丸地区での居住歴も40年以上に及んでいる。男性であるA氏（類型Ⅰ）・E氏（類型Ⅳ）は三の丸地区で出生し、一貫して現住地に居住している。自宅近隣で就業もしくは自宅就業であり、退職後には自治会・町内会や氏子組織をはじめとする地域コミュニティの活動に携わっている点も共通している。女性であるF氏（類型Ⅴ）の例では、婚姻を契機に三の丸地区に居住を開始し、約50年が経過している。三の丸地区を中心とする比較的狭い範囲に友人が集中しており、その契機は自治会・町内会や公民館講座への参加である。女性の場合、男性と比較して、地域のコミュニティ活動への参加率が高く、近隣の住民との交友が盛んである。

一方、水戸市内（三の丸地区を除く）や市外に主として友人ネットワークを築いている類型は3

つ（類型Ⅱ-1、Ⅱ-2、Ⅲ）である。友人ネットワークが広域にわたっているこれらの類型の場合、現住地への居住年数が相対的に短く、20~30歳代の若年層の人たちが多数を占めている点に特徴がある。その中でも、三の丸地区にも友人を持つB氏（類型Ⅱ-1）は、三の丸地区の出身であり、大学進学時に水戸を離れたものの、就職を契機に再び三の丸地区に居住している。就業者の場合、友人は職場や大学時代のネットワークを介して広域に組織されるが、同氏は自治会・町内会や公民館活動、PTA活動などの地域活動を通して、近隣地区にも友人ネットワークを形成している。C氏（類型Ⅱ-2）の場合、学生時代の友人がネットワークの基盤であり、大半が水戸市外に居住している。三の丸地区の出身であっても、地域活動への参加が困難な未婚・就業者の場合には、自地区内での友人ネットワークは希薄であり、学生時代に培った友人関係に加えて、社縁を介しての友人がネットワークの基盤となっていることがわかる。D氏（類型Ⅲ）のように、他地域の出身で職場の関係で現在三の丸地区に居住しているという事例では、B・C氏と比較して、よりいっそう三の丸地区住民との関わりは希薄である。居住地こそ三の丸地区であるが、友人ネットワークはD氏のライフパスに応じて、茨城県外を中心に形成されている。

以上の事例から、友人関係が形成される機会として、学校・職場・地域活動の3つを抽出することができる。「どこで」「どの時期（年齢）に」これらのライフイベントを経験したかが、友人ネットワークの構築に影響しているといえる。

このように友人ネットワーク空間の形成には、個人のライフパスが最も重要であるが、第二点として、三の丸地区の地域的条件も重要である。

三の丸地区はこれら友人獲得機会の供給源として機能している。三の丸地区には公立の小・中・高等学校が計5校あるが、これらの学校が若年層における広範囲な友人ネットワークを支えていた。就業機会の豊富さも都市中心部に位置する三の丸地区の特徴である。三の丸地区外の出身者が

三の丸地区で就業することを通して、職縁を介した友人ネットワークを構築する例がみられた。また地域活動は特に退職した高齢者において重要な友人ネットワーク形成の場となる。三の丸地区は自治会・町内会活動やサークル活動が盛んである。都市中心部に位置するため公民館の交通利便性が高く、地区住民内外に広く利用されていることが一因である。

本論文が対象とした都市中心部の性格は、近年大きく変容している。一般にわが国の主要都市の中心部は1980年代以降、住宅地区、商業地区としての性格が薄れ、業務地区などに特化していく傾向がみられた。都心部では工業機能は低下し、行政機関や教育機関も郊外へ移転する例が数多くみられた。三の丸地区も例外ではなく、茨城県庁が市内笠原地区に移転すると、昼間人口は減少し、

近隣の飲食店や小売店の売上などにも深刻な影響が生じている。モータリゼーションの進展と郊外型ロードサイドショップの出現により、商業中心は郊外へと移りつつあり、都市中心部は重大な岐路に立たされているといえる。一方で、バブル経済崩壊後の都心部における地価の下落を受けて、都市中心部に高層マンションの新築が続いており、1990年代後半からは、人口の都心回帰といった現象も生じている。

このようにめまぐるしく変容を続ける都市中心部の居住者は極めて多様である。これに呼応して、友人ネットワークも多様であるが、今後大きく変化していくことも予想される。都市における友人ネットワークの形成の問題は、地理学において今後とも注視していくべき課題であるといえよう。

本稿を作成するにあたり、水戸市役所および水戸市住みよいまちづくり推進協議会事務局の方々には貴重な資料を提供していただきました。またアンケート調査実施の際には、住みよいまちづくり推進協議会浅野泰子氏、三の丸公民館前館長藤咲俊明氏、現館長根元恒夫氏に多大なご助力を賜りました。また、三の丸地区にお住まいの住民の方々には、アンケート調査および聞き取り調査にご協力いただきました。2000年の調査の際には筑波大学大学院教育研究科院生の羽成祐子氏のご協力を賜りました。以上、記して感謝を申し上げます。なお本研究の一部には文部科学省科学研究費補助金（課題番号13480014 研究代表者 田林 明）、および同補助金（課題番号13780051 研究代表者 松井圭介）の一部を利用した。

【注および参考文献】

- 1) 松本 康編 (1995)：『増殖するネットワーク』勁草書房、281p. 森岡清志 (1995)：都市社会とパーソナルネットワーク ―パーソナルネットワークの成果と課題―、都市問題、86-9, 3-15. など
- 2) 都市は人々がそれぞれ個人的に知らない人々に取り囲まれている場所である一方で、大量・高密度・高異質的な人口集団を擁することによって、自分と同じ趣味や嗜好を持つ人々と出会う可能性が小規模な集落よりも高い場所である。そうした出会いの可能性の高さが、都市においてさまざまな下位文化 (Subculture) を強化する、という理論。フィッシャー、C.S. 著 松本 康・前田尚子訳 (1996)：『都市的体験』未来社、490p.
- 3) 大谷信介 (1995)：『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク』ミネルヴァ書房、253p.
- 4) 松井ほか (2000) でも、ひたちなか市において中学校区を単位とする地区コミュニティ制度に関する報告がなされている。松井圭介・岩間信之・兼子 純・栗島英明・佐々木緑 (2000)：ひたちなか市における地域集団の存立基盤。地域調査報告、22, 69-109.
- 5) 区分けとしては五軒町・泉町・備前町と大町・南町・梅香を境に西部を第1大区（5つの小区により構成）とし、東部を第2大区（4つの小区により構成）とした。
- 6) 他には五軒・新荘・城東・浜田・常盤であった。
- 7) 5～13世帯を単位に1つの班を構成していた。
- 8) 「水戸市民憲章」では都市基盤の整備・産業の育成・公共施設の充実のほか、市民との対話の機会の

拡大を目標としていた。

- 9) 水戸市には1,123の町内会がある。
- 10) 地域部は54各町内会全てに設置されているのは女性会のみであり、高齢者クラブが11ブロックごとである。その他の組織は、各町内会の状況に応じて、設置の有無がみられる。
- 11) 根本町周辺の整備では台地上の三の丸地区と低地の根元町・水府町にエスカレータを設置することにより、人の流動性を高めようとするものである。南町周辺整備では、国道50号にトランジットモールの設置、地区内の道路の拡幅などを提案した。
- 12) お堀の桜を愛する会では今後の活動資金を来訪者のカンパにより得ている。ここでの会員とは、カンパした人を指す。
- 13) 他にも三の丸コミュニティ内での事業であった「あー、人生に涙あり」が水戸市全体の事業となった。この事業は、テレビで放映されている「水戸黄門」のテーマ曲にちなみ、地区内の住民の人生の歩みを後世に伝えようとした事業である。
- 14) 当時の渡里公民館は渡里村の管轄であったが、1955年に水戸市と合併したため、55年以降は水戸市に移轄されている。
- 15) この計画では「あたたかい社会福祉都市」「緑豊かな市民環境都市」「活力ある市民環境都市」といった市民環境や都市整備に重点をおかれた都市の形成を目標としていた。
- 16) この基本方針には、①文化的な生活環境を作ること、②文化施設のネットワークを作ること、③都市経済の活性化を図ることの3つ方針があった。
- 17) 人材研修制度として「あなたも師・達人」制度がある。この制度は、公民館での講座や研修会での講師として市民の参加を活発にさせるための登録制度である。
- 18) ここでの自主学級講座数は定期的に関講されているものをあげた。不定期なものとしては、115～130の団体が利用している。
- 19) 三の丸地区での高齢化率は18.4%と水戸市の平均高齢化率（15.5%）より高い値を示している。
- 20) 水戸市教育委員会編（1999）：『平成11年度公民館事業実績一覧』水戸市教育委員会生涯学習課，1p.
- 21) 1988年に当該事業は「三世代祭り」とされていた。
- 22) 利用者の上位5公民館をみていくと、見和公民館の45,970人、堀原公民館の43,365人、石川公民館の43,213人、古田公民館の39,355人である。
- 23) 原則として水戸市民であれば、市内に立地する全ての公民館の利用が可能である。
- 24) 聞き取り調査によると、制限前の1996年までは自主学級講座の利用が約200団体であったのが、2000年には約130に減少した。
- 25) 類型VIは類型Vと類似した傾向をもつため、IV章ではF氏の事例で代表させている。

「地域コミュニティに関するアンケート調査ご協力をお願い」

回答者ご自身についてお伺いします。

問1. 1) あなたの年齢をお答えください。

- ①10代 ②20代 ③30代
④40代 ⑤50代 ⑥60代 ⑦70歳以上

2) 性別をお答えください。

- ①男性 ②女性

3) 現在同居されているご家族は何人ですか。

□ 人

4) 現在、就業(パート・アルバイトも含む)、あるいは就学されていますか。該当する番号すべてに丸をつけてください。

- ①勤めている ②パート・アルバイトをしている ③就学している
④どちらもしていない ⇒問2へ

5) 4)で①～③と答えた方にお伺いします。通勤・通学先はどちらですか。市区町村名でお答えください。三の丸地区内に通勤・通学している方は、大字名までお願いします。

通勤先

□ 都・県 □ 市区町村

* 三の丸地区内に通勤されている方

水戸市 大字 □ 町 □ 丁目

通学先

□ 都・県 □ 市区町村

* 三の丸地区内に通勤されている方

水戸市 大字 □ 町 □ 丁目

問2. 三の丸地区での居住年数についてお伺いします。

1) 現在の住所に何年くらいお住まいですか。 □ 年

2) 現住所に移る以前は、どちらにお住まいでしたか。
(生れてからずっと現在の住所にお住まいの方は①に丸をしてください)

- ①住所の移動はない
②三の丸地区内から ③三の丸以外の水戸市から
④水戸市外から [] 県 [] 市区町村

つづいて、回答者ご自身のコミュニティ活動への参加状況についてお伺いします。ここでいうコミュニティ活動とは以下の3種類を指します。

- 1) 自治会・町内会活動 2) 三の丸地区コミュニティ連合会活動
3) 三の丸公民館の各種講座・クラブ

問3. 以下に挙げるコミュニティ活動のうち、あなたが参加したことのあるものはどれですか。参加したことのあるものすべてに丸をつけてください。

1) 自治会・町内会

- ①自治会・町内会役員 ②女性会(各自治会・町内会支部)
③町内清掃作業 ④廃品回収
⑤商店街振興組合 ⑥そのほかの活動()

2) 三の丸地区コミュニティ連合会

- ⑦三の丸地区コミュニティ連合会役員

- ⑧三の丸地区女性会 ⑩子供会育成連合会
⑪高齢者クラブ連合会 ⑫三の丸小学校PTA
⑬三の丸食生活改善推進委員 ⑭保健推進委員三の丸支部
⑮三の丸地区婦人防火クラブ ⑯三の丸育成連絡会
⑰地区運動会
⑱各種イベント(三の丸サンサンまつり、三世代手打ちそば作りなど)

3) 三の丸公民館・みと好文カレッジ

- ⑲公民館主催講座(家庭教育学級、女性教養講座など)
⑳定期講座・クラブ(絵画、書道、社交ダンス教室など)

問4. 問3で挙げた団体や組織のうち、あなたが特に熱心に参加されているものがあれば、その番号を記入してください。またおおよその参加回数をお答えください。

番号 □ □ 回/月

問5. 問3で挙げた団体や組織のうちで、役員を務めたことがあるものがあれば、その番号を記入してください。

番号 □

つづいて日常の交際・お付き合いについてお伺いします。

問5. あなたが友人としてお付き合いなさっている方についてお伺いします。

- A. 親しい友人としてお付き合いしている方は何人いらっしゃいますか。
[] 人
- B. Aで挙げていただいた友人の中で、水戸市内にお住まいの方は何人いらっしゃいますか。
[] 人
- C. Bで挙げていただいた友人の中で、三の丸地区にお住まいの方は何人いらっしゃいますか。
[] 人
- D. Cで挙げていただいた友人の中で、同じ町内会にお住まいの方は何人いらっしゃいますか。
[] 人
- E. Aで挙げていただいた友人の中に、次のような方はそれぞれ何人いらっしゃいますか。
(同じ方を二度以上数えられても結構です)

- (1)現在の職場・仕事関係 [] 人 (2)学校時代の友人 [] 人 (3)コミュニティ活動を通じての友人 [] 人
- (4)子供を通じての友人 [] 人 (5)習い事・サークルを通じての友人 [] 人

問6 これまで挙げていただいた方々以外で、
日頃から親しくなされている方についてお伺いします。

- A. 親しい友人以外で、日頃から親しくされている職場・仕事関係の方は何人いらっしゃいますか。
[] 人
- B. 同様に [] 人
- C. 同様に [] 人

ところで、親族以外の友人で、あなたにとって最も親しい方を2人思い浮かべてください。
その2人の方を仮にAさん、Bさんとします。

【ここからは、Aさんについてお伺いします】

- (1) Aさんとはどのようにして知り合いになりましたか
3. 子供の幼稚園・学校が同じ 4. 趣味・おけいごとを通して
5. 近所に住んでいる(住んでいた) 6. コミュニティ活動を通して
7. その他()

- (2) Aさんは、現在どこにお住まいですか。
1. 向い三軒両隣 2. 同じ町内 3. 同じ町内以外の三の丸地区内
4. 三の丸地区以外の水戸市 5. それ以外

- (3) Aさんとは、この1年間にどのくらいお会いになりましたか。
1. 毎週1回以上 2. 毎月1回以上 3. 年4回以上
4. 年1回以上 5. なし

- (4) Aさんとは、主にどこでお会いになりますか。
(例: 公民館、友人宅、自宅、職場など。できるだけ詳しくお答え頂けると幸いです。)
[]

- (5) Aさんの性別・年齢をお聞かせ下さい。
<性別> <年齢>
1. 男性 1. 10代 3. 30代 5. 50代 7. 70代以上
2. 女性 2. 20代 4. 40代 6. 60代

【次に、Bさんのことについてお伺いします】

- (1) Bさんとはどのようにして知り合いになりましたか
3. 子供の幼稚園・学校が同じ 4. 趣味・おけいごとを通して
5. 近所に住んでいる(住んでいた) 6. コミュニティ活動を通じて
7. その他()

- (2) Bさんは、現在どこにお住まいですか。
1. 向い三軒両隣 2. 同じ町内 3. 同じ町内以外の三の丸地区内
4. 三の丸地区以外の水戸市 5. それ以外

- (3) Bさんとは、この1年間にどのくらいお会いになりましたか。
1. 毎週1回以上 2. 毎月1回以上 3. 年4回以上
4. 年1回以上 5. なし

- (4) Bさんとは、主にどこでお会いになりますか。
(例: 公民館、友人宅、自宅、職場など。できるだけ詳しくお答え頂けると幸いです。)
[]

- (5) Bさんの性別・年齢をお聞かせ下さい。
<性別> <年齢>
1. 男性 1. 10代 3. 30代 5. 50代 7. 70代以上
2. 女性 2. 20代 4. 40代 6. 60代

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。